

書 評

小林隆児 (著)

「自閉症スペクトラムの症状を「関係」から読み解く—関係発達精神病理学の提唱—」

2017年 A5判 292頁 ミネルヴァ書房 3,500円+税
ISBN 978-4-623-07912-4

著者のこれまでの仕事は、臨床を通して得た確信と世間に流布している通説との戦いの産物であったと言える。批判（時には非難）され、挑戦され、それを受けて著作を世に問い、シンポジウムや対談を企画し、発信し、討論する。そしてそれを受けてまた論の説得力を鍛え…といった弁証法的な考究のプロセスが著者のここ数年の発達障害（自閉症スペクトラム）をめぐる著作群となって結実している。成因論、生涯発達論、治療論がそれぞれ成書となり、そして本書が精神病理学である。

本書もまた自著に向けられた疑問に答えることが大きな動機となっている。しかし、今回はこれまでとは少しわけが違ったはずである。これまで著者は、発達障害の原因を脳の（機能）障害に単純に求める「定説」を主たる相手として戦ってきた。「子どもだけを見ているも本当のことは分からない。養育者との関係のなかで揺れ動く乳幼児期早期の「甘えたくても甘えられない」心理にこそ、発達障害の起源がある。この心理機制が緩和されないことへの彼らなりの対処の仕方が、「症状」や人格のあり方として発展していくのだ。」著者はこうして個体還元論的な立場の不備を論及し、自説を展開してきた。関係発達論を旗幟鮮明に掲げる立場からすれば、それでよかったです。ところが今回はそれだけでは済まなくなった。

というのは、前著『甘えたくても甘えられない』に呈された疑問は、他でもない、著者が敬愛する滝川一廣、鯨岡峻の両氏から投げかけられたものだったからである。それは、「本来は誰もが抱えるはずの『甘えのアンビヴァレンス』が、なぜ発達障害の子どもや青年においては病理にまで至るのか」——どんな子でも体験するこの心理が、その子がまさに発達障害と呼ばれる状態にあることにどうつながっているのか——という問いである。関係発達の何たるか、著者の主張の何たるかを最も深く知る人物に数えられる両氏から発せられた疑問。著者にとって、これは放っておけないものであったろう。著者は、『甘えのアンビヴァレンス』を基盤にして多彩な精神病理が成り立つことを、すべて自験例をもとに論じることでこれに応じようとした。

両氏への「回答」という性格が本書にあるのだとすると、本書の評価は、彼らの問いに十分答えられたのかどうかという軸によってまずは測られなくてはならない。少なくともこの書評において評者はそこを重視する。この観点に立つとき、評者の見解は「なお問いは残る」である。評者の問いはこうである。なるほど、発達障害に特異とされる行動や症状、のみならず、これまで一般精神医学で取り扱われてきたほとんどの精神病理現象の背後に「甘えのアンビヴァレンス」が蠢いていると解しうるとは分

かった。だが、問われているのは「なぜ、かくも“症状”として発展するほど強固に、甘えのアンビヴァレンスをめぐる悪循環が緩和されたい場合があるのか」ではなかったか。これについて、事例記述およびその解釈のなかで、養育者自身の「甘え」体験の歴史が何がしか反映されている場合があることは見て取れる。しかし、それだけなのだろうか。そこに子ども側の個体的条件や要因を勘案する必要はないのだろうか？

この問いは、これまで著者がうんざりしながら戦ってきた個体還元論と同じではないはずである。著者自身、本文中、次のように述べている。「子どものこころの成長【発達】とその【障碍】がどのようにして起こるのか、その成立過程こそ、素質と環境のダイナミックな絡み合いの所産である」と。しかし、その素質について、したがってまた素質が環境とどのように絡み合うのかについても、著者は寡黙であるように思う。もちろんかつて著者が小倉清から示唆を受けた通り、知覚過敏の問題一つとっても、「知覚はたんに知覚のみの問題ではなく、情動が深く関係している」ことは疑いない。純粹に脳神経学的次元のみの理解では方はつかないであろう。しかしそこは「鶏と卵問題」である。大多数の乳児にとっては快や安心をもたらす刺激や関わりが脅威や侵襲と体験されてしまい、かつ

通常ならばそのような場合においても養育者との関わりをなかで快や安心の方が増してくるものなのに、そのような補正がなされがたいのはなぜか。そこに子ども側のレディネス（たとえば、“人間に関心を向ける力”など）も要因の一つとして想定することは、ごく自然なことに見える。生まれ落ちた子どもにはすべて、幅やばらつきがあって当然だからである。それをしかと視ることが、「関係」とその発展の様相をより精緻に描く足掛かりになりはしないだろうか。以上が著者の「回答」に対して評者が抱く問いである。

しかし、このような評価軸とはまた別に、本書から評者が受け取るのは、本来理解されるべきことが周囲に理解されないままになることを決してよしとしない、著者の情動と揺るがぬ意志である。関係発達精神病理学という新たな学を提唱する一見大胆な試みの背後に、痛々しいほどに切実な、しかし理解されがたい患者の「こころそのもの」を生々しくとらえる臨床家の観察眼と感受性がある。そしてそれを詳細に伝えようとする研究者の粘りがある。それらを堅持してきた足跡の重みを評者は本書に感じる。おそらく、他の読者においてもそのような書となるであろう。

(児童養護施設川和児童ホーム：内海新祐)